

WVAC2026 東京大会のプログラムについて

このコーナーでは過去数回に渡り世界獣医師会大会 2026（東京大会）のテーマやコンセプトなどをお話してきましたが、今回はもう少し具体的な内容についてご紹介したいと思います。これらの内容はプログラム委員会（委員長：丸山総一郎 本大学特任教授）の先生方が現在進行形でご検討しているものですので、今後少々変更があるかもしれません。あくまで現時点の検討内容ということでご理解をいただけますと幸いです。

来年 4 月に開催される世界獣医師会大会 2026 の全体を通じたテーマは以前もご紹介したとおり「ワンヘルスで世界の獣医療が示す未来」です。このテーマに沿ってどのような大会にしていくのか、具体的には、プログラムの項目をどのように立ててこのテーマを学術的に深堀していくのかということをプログラム委員会の先生方にご検討いただいています。プログラム委員会で決定した項目は招待講演の方向性を決めるのみならず、世界獣医師会大会の一般演題もこの項目に沿って募集されることになりますので、世界の知識を集約するための旗印ということになります。

まず、「感染症関連」については多くの感染症の病原巣として重要な動物であるコウモリに由来する感染症や、Disease Ecology（「疾病生態学。宿主と病原体の相互作用を環境及び進化の文脈の中でとらえる生態学的な研究」と、とある文献に書いてあります）に注目し、マダニやカなどのベクターが媒介する感染症を扱うことが検討されています。こうした明確な切り口を持つことで、現在のわれわれを取り巻く環境と感染症の問題がより明確になるとともに、きつとよりよい対処法も見えてくることでしょう。環境の変化で野生動物と人間社会の距離感が変化することや、温暖化によりベクターの生息域が変化することが疾

病の動態にどのような影響をもたらすのかなど、興味が尽きない分野です。

また、国際獣疫事務局（WOAH）にも協力いただき、豚熱、アフリカ豚熱、口蹄疫、鳥インフルエンザ、狂犬病といった越境性感染症について、世界の最前線の情報を共有いただくことも予定しています。

豚熱については、2018 年 9 月に岐阜県で発生が確認されて以来、ワクチン接種やバイオセキュリティの強化などに生産者、獣医師、そして行政の職員等といった関係者が一丸となって膨大なコストと労力を払い続けていますが、発生が断続的に続き 2025 年 5 月の群馬県での発生により 99 件目を数えています（農林水産省ウェブサイトによる）。また、鳥インフルエンザは季節的な発生を繰り返し、われわれが普段スーパーで目にする卵の価格にも影響を与えていますし、2010 年の宮崎県での口蹄疫の発生により地域の畜産に多大な被害を与えたことは、いまでも多くの関係者の脳裏に深く刻まれています。家畜が生物である以上こうした伝染性疾病との戦いに終わりはないのかもしれませんが、多くの皆様が最新の科学に基づく知識を備え、その戦いが少しでも有利に進められることを願って止みません。

次に、「臨床獣医学関連」ではロボット手術や Pharmacogenetics（個人の遺伝的差異が薬物への反応にどう影響するかを研究する学問分野です）、再生獣医療など先端臨床獣医学を取り上げ、最新の獣医療の動向を扱うとともに、アニマルシェルターにおける動物の問題行動や安楽死の問題、さらに動物の避妊手術と獣医学教育との連携についても検討を進めていきたいと考えています。これらと並び災害時の獣医療も注目したい点の一つです。これまでわが国は地震をはじめとする多くの自然災害に見舞われ、また、それを乗り

越えてきた経験がありますが、そのような災害時の獣医療や救急獣医療の分野にはまだまだ検討すべき点が残されているのではないのでしょうか。この世界獣医師会大会 2026 を通じて多くの皆様に関心を持っていただき、より深く、総合的な検討を進めるきっかけにしたいと考えています。

3 番目は「野生動物関連」です。環境中の化学・放射線物質の野生動物への影響や、新たな脅威となってきた野鳥、牛、アザラシ、ラッコといった鳥以外での鳥インフルエンザの発生など、いままでにない切り口から野生動物について考える機会を作っていきます。また、海外の事例などを参考にビッグデータを活用した野生動物の感染症管理についても深掘し、傷害鳥獣データを利用した野生動物の健全性評価やサーベイランス手法についても理解を深めていきたいと考えています。

こうしたポイントは動物と人と環境の健全性を一つのものと考えるワンヘルスの理念からすれば不可欠な取組であることが明白なのですが、獣医師の先生方の中にはこれまであまり専門的な議論に触れることがなかった方も多いのではないのでしょうか。参加いただいた皆様に「それは昨日までのことですよ」といっていただくこと、それがこの大会の目標の一つです。

最後に「その他」のセッションを設けています。本大会のユニークさはここに詰まっていると考えています。

「その他」の領域の中には、いま社会でも広く活用されている人工知能（Artificial Intelligence：AI）に関するセッションを予定しています。これからの獣医学領域においてもその有用性に疑いの余地はなく、AI を用いた感染症の流行予測、AI の病理学・獣医法医学への応用、AI を用いた寄生虫検査、AI を活用したスマート畜産、AI を用いた野生動物種の判別、疫学における AI の活用、といった新たな AI の活用項目が案としてあげられています。

また、ワンヘルスについて地球そのものの健康を科学的に分析するプラネタリーヘルスの視点から俯瞰することで、ワンヘルスの理念そのもの

についてもさらに理解を深めていく予定です。

さらに、獣医学教育の分野では、獣医臨床を適切に実践するうえでも欠かせない基礎教育の重要性、欧米及びアジアの獣医学教育認定制度の比較と獣医学教育への重要性を取り上げていただく予定としています。

医学や獣医学の領域では、さまざまな抗菌性物質が使用され、それらの過剰使用による弊害が問題となっています。そこで、「AMR の新たな問題点」を切り口として小動物、寄生虫、畜産、水産分野など幅広い領域を対象として、多くの皆様に AMR の問題への関心を深めていただきたいと思います。特に、私たちが日ごろ食用とする多くの魚介類は養殖に頼っており、また多くが海外から輸入されています。そこでブリやエビなどの養殖魚介類に使用されている抗菌性物質の過剰使用の問題点などにもスポットを当てていきたいと考えています。

また、牛や豚の日々の生産性に多大な影響を与える呼吸器疾患や繁殖に関連する疾病も見逃すことができませんし、情報化が進む中でより多くの消費者の懸念事項となっている動物福祉についても目を逸らすことなく扱いたいと考えています。

近年多くのペットが飼育されるようになると、動物虐待や不審死が社会問題化するようになってきました。医学の分野では、法医学は古くから知られていますが、獣医学の領域でもそれらの法的问题を科学的に解明するうえで重要な役割を果たす法獣医学（筆者はこの業界に 20 年以上おりますが、正直こうした分野があることも知りませんでした）が注目されるようになってまいりました。そこで新分野である法獣医学についても取り上げ、法獣医学の必要性和そのネットワーク形成についても検討を深めていただく予定です。

こうした取組のほか、動物と人の共生によるメリットの追求や、アジアの若手獣医師を集めた取組、愛玩動物看護師の皆様に向けた演題の用意なども事務局として進めていくこととしていますし、世界獣医師会が用意するプログラムではワンヘルス、アニマルウェルフェア、動物用医薬品、獣医学教育といった世界獣医師会が日々検討している重要課題について世界中の専門家が集い、議

論することが予定されてもいます。これらが総合的に組み合わせられることで、幅広く多くの皆様に価値ある情報を提供できる形が見えてきたものと考えています。

今回は世界獣医師会大会 2026（東京大会）のプログラムについて、少し具体的にその内容をお話してみました。いかがでしょう。これほど多岐に渡って興味深いトピックが詰め込まれた機会は

これまでにないはずです。また、広範な知識のアップデートが全 4 日間でできる、この世界獣医師会大会が日本国内で開催されるのは実に 31 年ぶり、1995 年以来的のこととなります。皆様にはぜひこの貴重な機会に、演者や参加者、出展者あるいはスポンサーなど何らかの形で参画いただき、2026 年 4 月 21 日（～24 日）には会場である東京国際フォーラムに直接足を運んでいただければ幸いです。